

# 海外食料需給レポート

(平成31年1月)

平成31年2月19日

農林水産省

# 海外食料需給レポートについて

## 1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、そのうち、主食や飼料原料となる主要穀物(米、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、安定供給に向けて世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

## 2 対象者

このレポートの対象は国民の方々の中でも、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

## 3 重点としている事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

## 4 公表頻度

月1回、月末を目処に作成、公表します

## 5 ここに記載のない情報は以下を参照願います。

### (1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し(農林水産政策研究所)：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

### (2) 農林水産関係機関の情報 (ALIC の情報サイト)：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_000168.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_000168.html)

### (3) その他海外の機関 (英語及び各国語となります)

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関 (FAO)：<http://www.fao.org/home/jp/>
- ・国際穀物理事会 (IGC)：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構 (OECD) (農業分野)：<http://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム (AMIS)：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関(代表的なものです)

- ・米国農務省 (USDA)：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社 (CONAB)：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省 (AAFC)：<http://www.agr.gc.ca/eng/home/?id=1395690825741>
- ・豪州農業資源経済科学局 (ABARES)：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

# 目 次

## 概要編

I	2019年1月の主な動き	1
II	2019年1月の穀物等の国際価格の動向	2
II	2018/19年度の穀物需給（予測）のポイント	2
III	2018/19年度の油糧種子需給（予測）のポイント	2
V	今月の注目情報	
	ウクライナの穀物の生産・輸出動向	3

## (資料)

1	穀物等の国際価格の動向	5
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	6
3	原油価格、為替、海上運賃の動向	7
4	平成30年7月以降の食品小売価格の動向	8

## 品目別需給編

### I 穀物

1	小麦	1
2	とうもろこし	6
3	米	9

### II 油糧種子

	大豆	14
--	----	----

## 【利用上の注意】

本レポートについては本年1月の米国農務省(USDA)の穀物等需給報告が行われなかったことから、USDAのデータについては、前年12月分を使用していることに留意願います。

## (概要編)

## I 2019年1月の主な動き

### 1 南米の生育動向

ブラジルでは、昨年12月末に主産地のマトグロッソ州やパラナ州の一部で乾燥気候となった。なお、マトグロッソ州では降雨に恵まれ早期に作付けが行われたことから、例年より早く大豆の収穫が開始された。

2018/19年度の大豆の生産量については、乾燥の影響から史上最高の豊作となった前年度を下回るものの平年と比べ高水準となる見通しで、また、とうもろこしの生産量については、乾燥の影響を受けた前年度より単収が向上するため増産となる見通しである。

一方、アルゼンチンでは、12月の降雨過多により大豆の作付けが遅れていたが、土壌水分が十分にあるため、1月に入り良好な生育状況となっており、生産量は前年度を上回る見通し。

### 2 2019/20年産小麦の作付動向

欧州、中国、米国等の北半球では2019/20年度の冬小麦の作付が終了しており、IGC（国際穀物理事会）の1月見通しでは、収穫面積は乾燥で減少した前年度よりEU、ロシア、ウクライナ等では増加、中国では減少する見通し。

春小麦を主に栽培するカナダでは、農務農産食品省によれば、乾燥天候等による大豆からのシフトにより作付面積は前年度をわずかに上回るとみられている。

なお、米国については、連邦政府予算の失効により、冬小麦の作付面積は公表されていないが、2月以降、米国農務省（USDA）アウトルックフォーラム等で公表されるとみられる。

### 3 米国連邦政府の機能の休止

米国連邦政府予算の失効により、USDAの1月分穀物等需給報告は行われなかった。

また、米国農務省は、予算失効時においても穀物や肉類、鶏卵の検査・等級格付け業務等について継続しており、米国産穀物・大豆等輸出について支障は生じていない。

なお、1月25日付けで予算が手当てされ、業務が再開された。

## II 2019年1月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、12月下旬、180ドル/トン台半ばで推移。その後、1月中旬に大豆、とうもろこしの下落につれ一時値を下げたものの、ロシアの輸出量の減少により、米国の輸出量が増加されるとの期待や米国主要産地での冬枯れ懸念等から値を上げ、1月下旬現在、190ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、12月下旬、140ドル/トン台後半で推移。その後、ブラジル産の乾燥天候による影響懸念から150ドル/トン台前後に値を上げたものの、1月中旬に米中の通商問題を巡る情勢から値を下げ、1月下旬現在、140ドル/トン台後半で推移。

米は、12月下旬は、420ドル/トン台半ばで推移。その後、タイでの収穫の遅れや、バーツ高等から430ドル/トン前半まで値を上げたものの、下旬になり新穀が市場に出回り始めたことから値を下げ、1月下旬現在、420ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、12月下旬、320ドル/トン台半ばで推移。その後、上昇。1月中旬に一時米中の通商問題を巡る情勢から320ドル/トン後半まで値を下げたものの、ブラジルでの乾燥天候による影響懸念から再び下旬にかけ値を上げ、1月下旬現在、330ドル/トン台後半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場、米はタイ国家貿易委員会価格

## III 2018/19年度の穀物需給(予測)のポイント

### IV 2018/19年度の油糧種子需給(予測)のポイント

(米国農務省の2019年1月分穀物等需給報告は行われなかったため、今月については記載していない。)

## V 今月の注目情報：ウクライナの穀物の生産・輸出動向

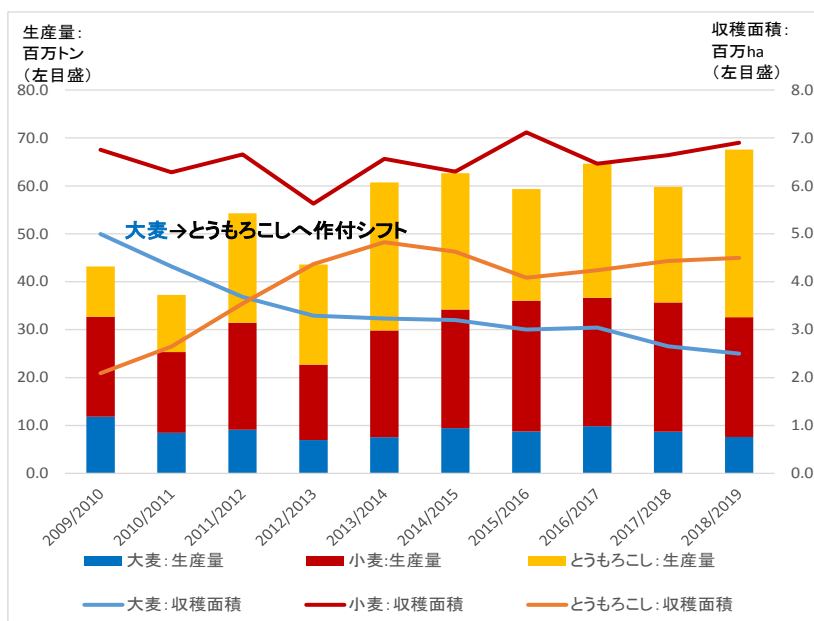
2018/19年度のウクライナのとうもろこしの生産量は史上最高となり、小麦についても、高い水準を維持する見通しとなっており、世界の主要輸出国となっている。最近のウクライナの生産・輸出動向についてまとめた。

### 1 2018/19年度の生産動向

#### (1) 小麦

小麦の生産に関しては、前年5月～6月にかけての乾燥の影響を受け、単収が低下したことから前年度よりは減産となるもの、25百万トンの生産量となる見通しである。過去からの生産量の推移を見ても、2014/15年度以降、収穫面積は6～7百万ヘクタールで生産量は概ね25.0百万トン前後と安定的に推移している。

図1 ウクライナの穀物の生産量の推移



#### (2) とうもろこし

前年度より収穫面積が増加した上に、夏期の降雨に恵まれ単収が向上し、生産量は史上最高となる見通し。ウクライナ農業政策食料省の12月5日のプレスによれば34.1百万トン（品質調整前）の見通し。

過去からの生産量の推移を見ても、2012/13年度以降、大麦の収穫面積を上回り、小麦に次いで2位。

出典：：USDA PS&D(2018.12)をもとに農林水産省にて作成

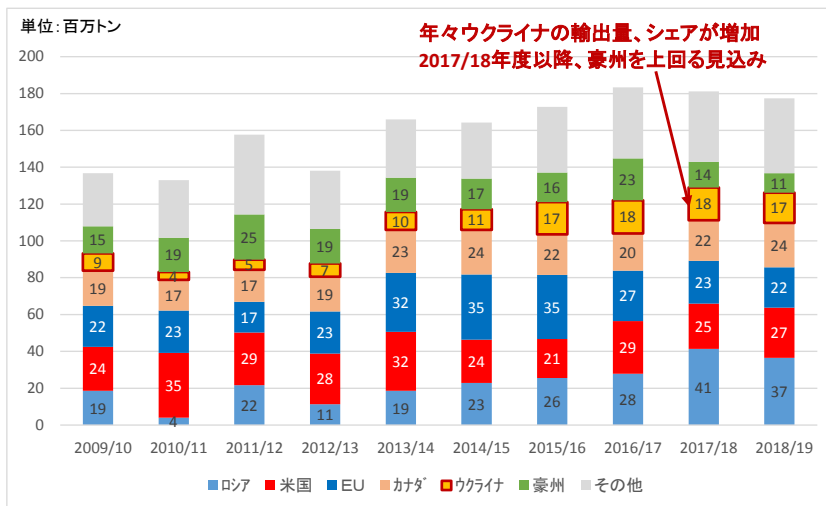
### 2 穀物の貿易動向

#### (1) 小麦

ウクライナは肥沃な黒土地帯に恵まれ、旧ソ連時代から小麦の生産が盛んで、ソ連の解体後も小麦の輸出国であり、近年、同じく旧ソ連のロシアと並び輸出量を増加させている。

特に、2017/18年度以降、豪州東部の干ばつによる豪州の輸出減等から世界に占める輸出量のシェアを伸ばしてい

図2 世界の小麦の国別輸出量の推移

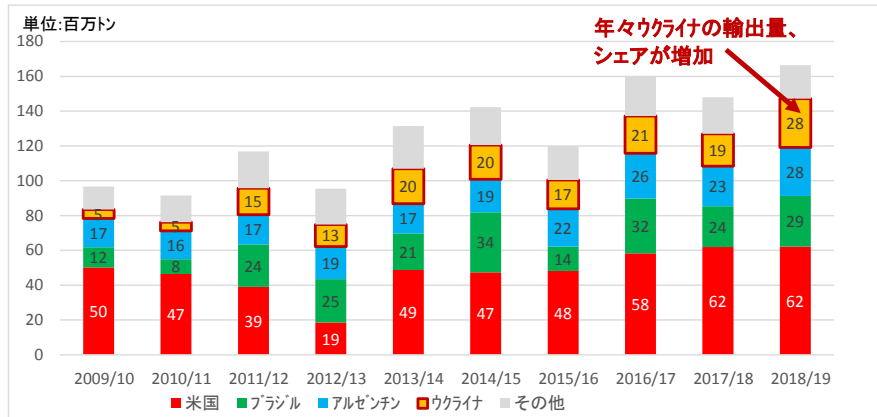


る。2018年7月～11月のウクライナの小麦輸出量9.3百万トンのうち、第一の仕向先であるインドネシア向けが1.9百万トン、第2位のフィリピン向けが1.3百万トン、タイ向けが0.4百万トンと従来、豪州の輸出市場であった東南アジア3か国向けで4割近くを占めている。ただし、最近小麦の需要が増加しているベトナムへは、ロシアが参加しているユーラシア経済連合とベトナムとの間で発効した自由貿易協定によりロシア産小麦が無税でベトナムへ輸出されるため、ウクライナ産はほとんど輸出されない。

(2) とうもろこし

近年のとうもろこしの増産に伴い世界に占める輸出量のシェアを伸ばしており、2018/19年度では、米国に次ぐ世界第2位の輸出国の地位を南米のブラジル、アルゼンチンと争っている。ウクライナ

図3 世界のとうもろこしの国別輸出量の推移



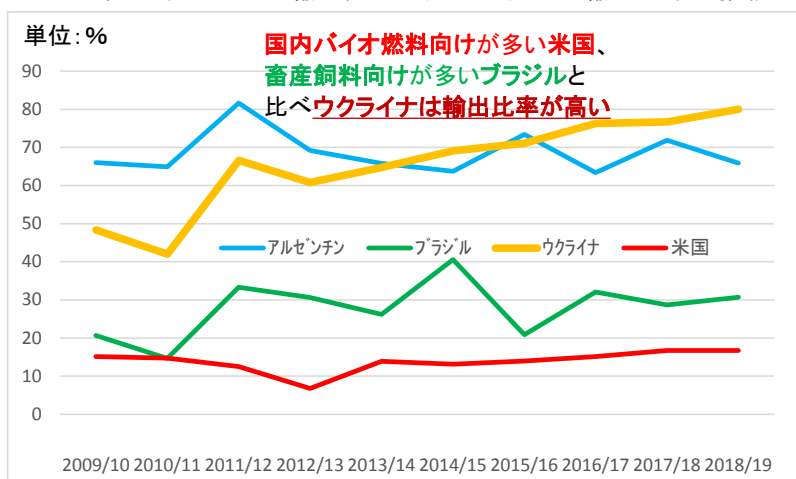
資料：USDA PS&D (2018.12) をもとに農林水産省にて作成

の2017/18年度(10月～9月)の輸出量の17.9百万

トンのうち、中国向けの2.7百万トンを除いて、オランダ、イタリア、スペイン、ポルトガルのEU向けが合計で6.5百万トン、エジプト、イラン、トルコ、イスラエルの中近東向けが合計で5.6百万トンと大きな割合を占めている。10月以降も、2018/19年度のEUの小麦の減産による飼料向け穀物需要の増加からEU向けの小麦輸出が半分以上を占めている。

世界の主要とうもろこし輸出国の輸出構造を比較すると、米国やブラジルは生産量に占める国内需要(米国のバイオエタノール向け需要、ブラジルの飼料向け需要)が多く、一方、ウクライナは輸出比率が高いという特徴がある。

図4 主要とうもろこし輸出国の生産量に占める輸出比率の推移



資料：USDA PS&D (2018.12) をもとに農林水産省にて作成

現在、主要輸出先は欧州や中近東が中心であるが、東南アジアの畜産物需要の増加に伴い、小麦に加え、と

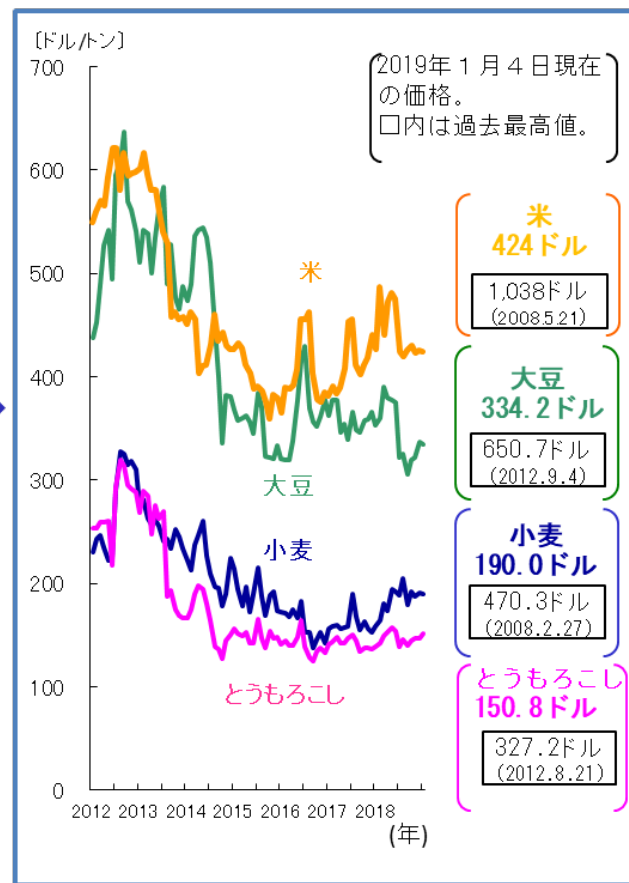
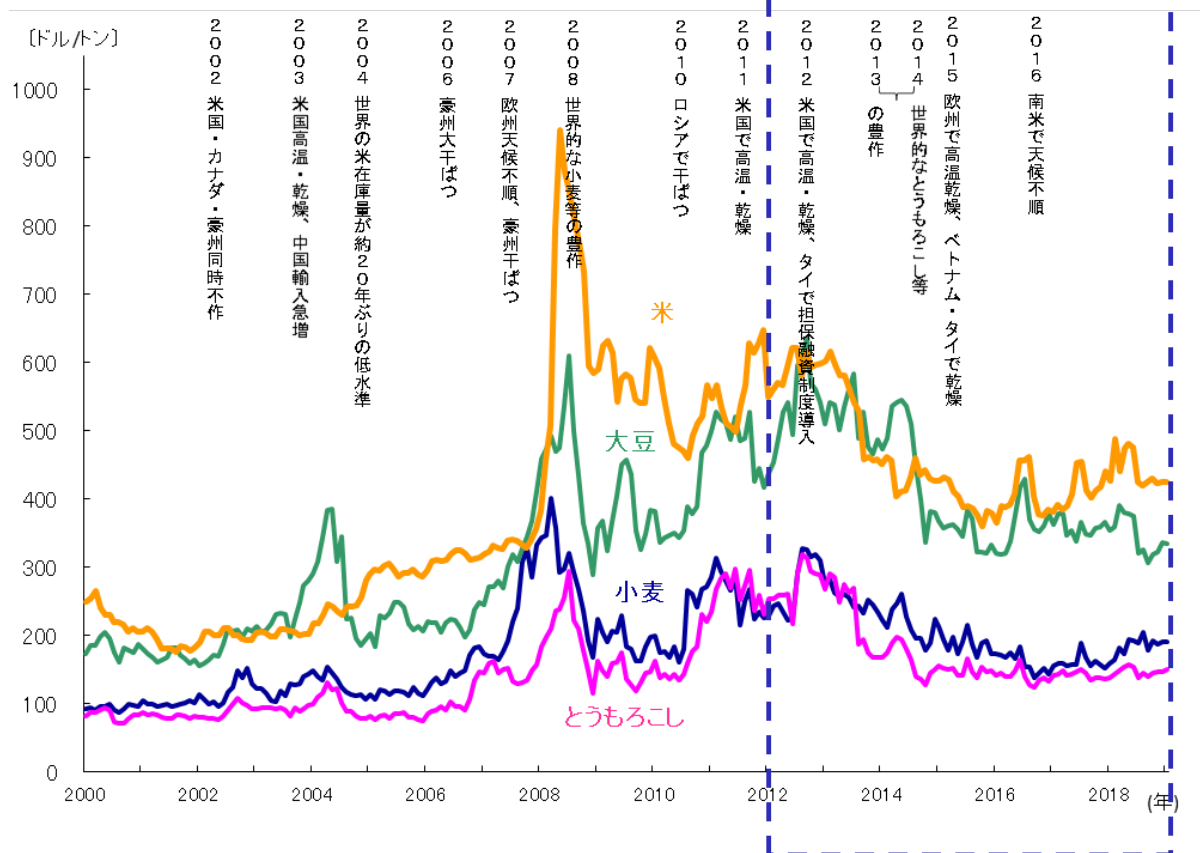
うもろこしの東南アジア向け輸出が増加する可能性もあるとみられる。一方、タイでは、増加する畜産需要をカバーするために飼料向けとうもろこしの確保に向け、稲作からとうもろこしへ転作を進めていることから、ウクライナの東南アジア向け輸出については、引き続き注視する必要がある。



# 資料1 穀物等の国際価格の動向(ドル/トン)

○とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な小麦やとうもろこしの豊作、大豆の南米での増産や米国での豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降横ばいで推移。米はタイの在庫放出等から低下したが、2017年以降上昇傾向。  
 ○なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により2008年以前を上回る水準で推移している。

## □ 穀物等の国際価格の動向

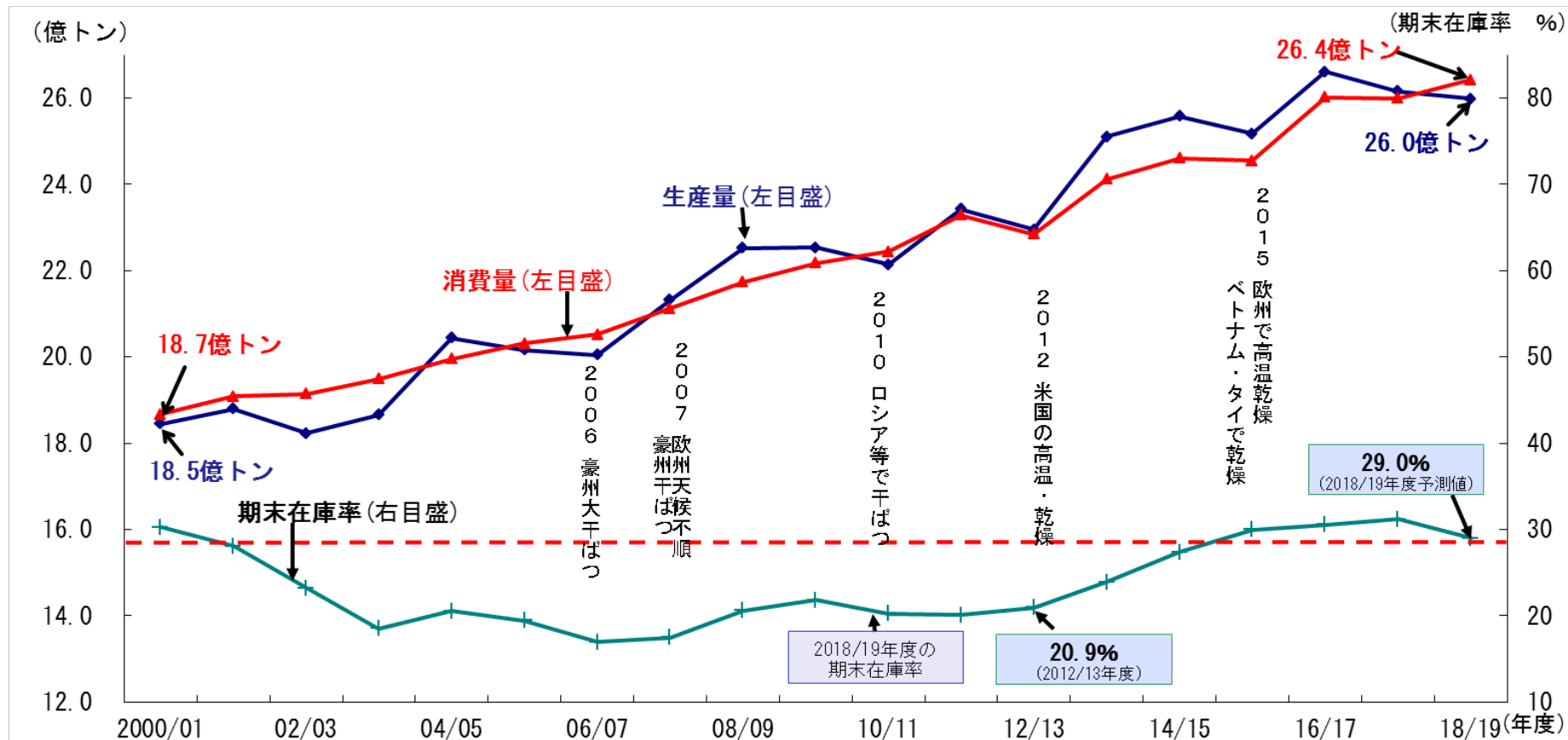


注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セツルメント)である。米は、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である(なお、1月2日は未公表のため、1月4日現在の米価格は12月26日の価格)。  
 注2：過去最高価格については、米はタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、米以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

## 資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2018/19年度は、2000/01年度に比べ1.4倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2018/19年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り29.0%となるものの、直近の価格高騰年であった2012/13年度(20.9%)を上回る見込み。

### □ 穀物(米、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移



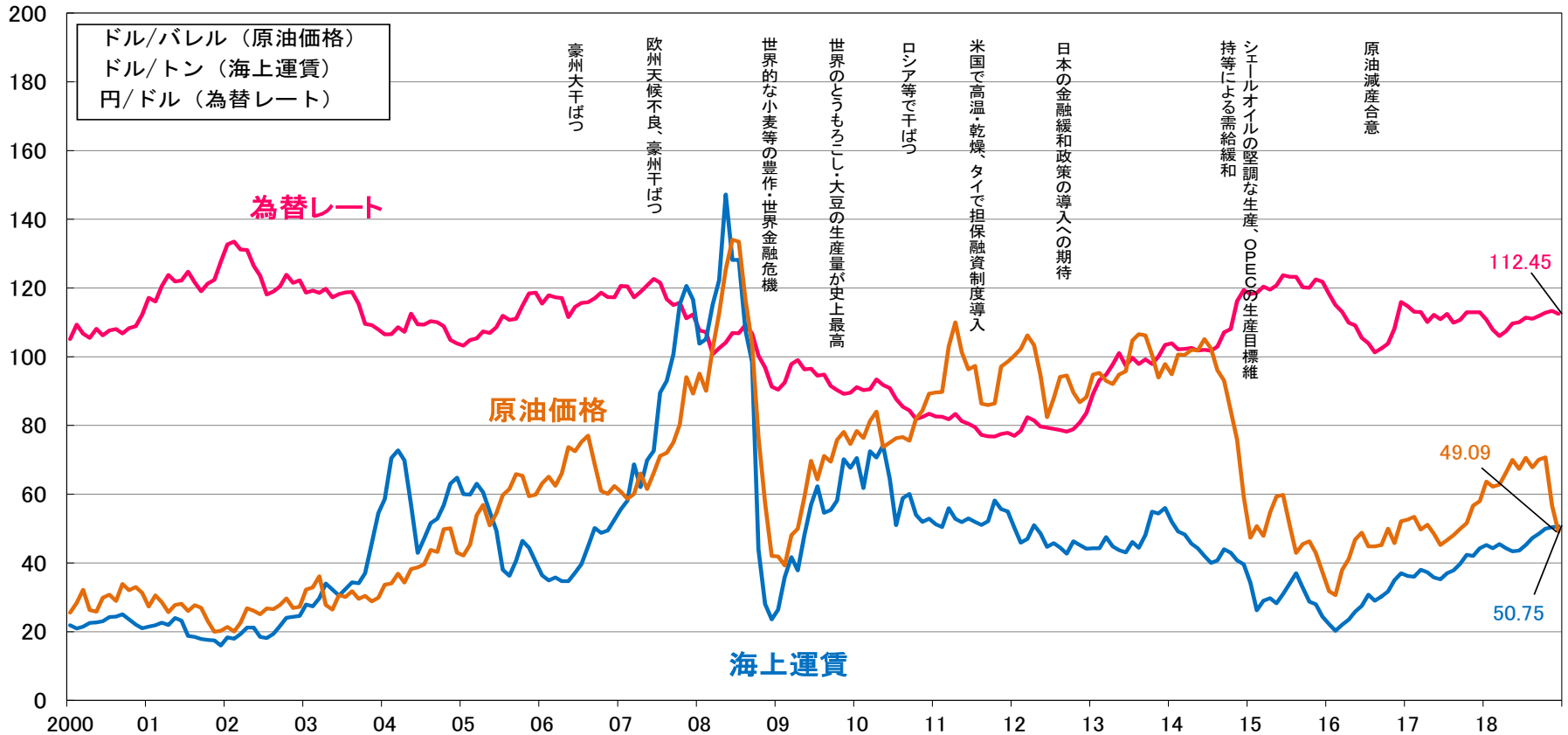
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(December 2018)、「PS&D」

(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

# 資料3 原油価格・為替・海上運賃の動向

- 1 近年、為替レート、原油価格及び海上運賃の大幅な変動が、我が国の食品における原材料コスト・価格に影響。
- 2 円/ドル為替レートは、2012年の金融緩和等により円安となった後、2017年以降は110円/ドル程度で推移。原油価格は、2008年から2009年初めにかけて大幅に下落した後、上昇傾向であったが、2014年6月以降にシェールオイルの堅調な生産、OPECの生産目標維持等による需給緩和で下落、2016年以降、減産合意等から上昇も、2018年末に下落に転じた。海上運賃は、2014年に新造船の供給増や原油価格の影響等により下落、2016年2月以降、原油価格の上昇や船腹需要の増加等により上昇。

【図】 原油価格、為替レート、海上運賃の動向



資料：(原油価格)内閣府「海外経済データ 月次アップデート」、米国エネルギー情報局(U.S. Energy Information Administration)「Weekly Petroleum Status Report」週別価格の平均値、(海上運賃)国際穀物理事会(International Grains Council) Ocean Freight Rates、「World Grain Statistics」,「IGC Grain Market Indicators」,「World Maritime Analysis Weekly Report」(米国ガルフー日本間パナマックス級の海上運賃)週別価格の平均値、(為替レート)日本銀行主要時系列統計データ表月次データの月中平均を基に農林水産省で作成。なお、掲載されている数値は2018年12月の平均値である。

# 資料 4

# 平成30年7月以降の食品小売価格の動向

○ 加工食品の国内の食品小売価格については大きな値動きはなし。

平成30年7月～平成30年12月の  
食品小売価格の動向

【参考】平成30年8月～平成31年1月の  
食品小売価格の動向(速報値)

消費者物価指数(総務省)												
品目	H25	H26	H27	H28	H29							上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	平均	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
生鮮食品を 除く総合	94.5	97.7	100.0	99.7	100.2	100.9	101.2	101.3	101.6	101.6	101.4	0.7%
食パン	96.3	98.5	100.0	101.1	100.9	101.0	101.5	102.4	102.7	102.5	102.6	2.0%
即席めん	92.0	94.2	100.0	100.0	99.5	99.1	98.7	98.6	98.5	99.0	98.7	-0.6%
豆腐	94.5	98.0	100.0	100.0	100.5	100.8	100.7	100.7	101.1	100.8	100.8	0.2%
食用油 (キャノーラ油)	102.6	102.8	100.0	97.8	94.5	93.4	92.4	92.9	93.2	93.2	92.1	-1.9%
みそ	99.7	100.6	100.0	99.4	99.1	100.5	99.6	100.0	99.7	99.3	99.7	1.0%
チーズ	87.4	97.9	100.0	99.3	98.8	104.6	105.5	104.4	103.6	103.7	102.5	2.7%
バター	90.9	95.0	100.0	101.5	101.7	102.2	102.1	102.0	102.1	102.2	102.5	0.7%
マヨネーズ	95.0	103.5	100.0	98.1	96.7	95.3	94.7	94.8	95.5	95.8	94.6	-1.5%

食品価格動向調査(農林水産省)													
品目	H25	H26	H27	H28	H29	H30					H31	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	平均	8月	9月	10月	11月	12月	1月		
食パン	96.2	99.3	101.7	102.6	101.3	102.5	103.2	105.6	105.6	106.0	105.4	-0.6%	—
即席めん	106.6	109.1	117.0	116.7	116.5	115.6	115.8	120.0	120.0	119.2	119.2	0.0%	—
豆腐	99.3	101.9	101.6	98.4	97.2	96.0	96.5	99.2	98.7	97.9	97.9	0.0%	—
食用油 (キャノーラ油)	91.2	91.2	88.7	85.2	84.0	82.5	83.5	90.2	93.2	89.7	90.8	1.2%	—
みそ	117.2	119.7	121.0	120.8	122.9	128.6	128.6	136.2	136.8	135.9	135.1	-0.6%	—
チーズ	111.0	125.4	129.4	129.4	129.0	136.1	135.9	140.3	138.9	140.3	139.6	-0.5%	—
バター	107.6	112.0	118.4	120.0	120.7	121.1	121.2	121.1	121.4	121.4	121.4	0.0%	—
マヨネーズ	103.7	112.2	110.6	109.8	108.9	106.4	106.5	115.5	115.1	114.7	115.8	1.0%	—

資料：農林水産省 食品価格動向調査(加工食品)

注1：平成20年1月の価格を100とした指数で表記している。ただし、バターについては平成20年5月の価格を100とした指数で表記している。

注2：調査は原則、各都道府県10店舗で毎週実施。

注3：調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4：マヨネーズのH24平均値は調査を開始した平成24年10月～12月平均。

注5：平成30年9月までの調査結果と10月以降の調査結果は、特売品の価格の調査方法が異なることから接続しないので、上昇率(前年同月比)は算出していない。